

富山県南砺市

神 成 遺 跡 V

—— 県営ほ場整備事業(担い手育成型)北山田北部地区
に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(9) ——

2007年3月

南砺市教育委員会

序

南砺市の中北部に位置する北山田地区は、山田川左岸の河岸段丘上に位置します。県営ほ場整備事業に伴い平成10年度から試掘調査を行った結果、縄文時代から近世までの様々な遺跡を発見し、多くの歴史的遺産が埋蔵されていることが分かりました。遺跡の大半は盛土により現地保存が図られましたが、用排水路用地及び一部の水田削平部分については平成12年度から本調査を実施し、記録保存を行ってきました。

今年度は北山田北部地区の神成遺跡の調査を実施しました。調査の結果、中世、近世の遺構が確認されました。また、縄文から近世の生活に用いられた土器も数多く出土しました。本書は、その調査の成果をまとめたものです。郷土の歴史の解明や学術研究等に活用していただければ幸いです。

終わりに、この調査の実施にあたり、富山県農林水産部、南砺市シルバー人材センター、ほ場整備事業北山田北部地区委員会をはじめ、地元住民の方々に多大なご協力を賜りましたことに、深く感謝を申し上げます。

平成19年3月

南砺市教育委員会

教育長 梧 桐 角 也

例　　言

1. 本書は、県営ほ場整備事業(扱い手育成型)北山田北部地区に伴う富山県南砺市神成遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、富山県農地林務部の委託を受け、南砺市教育委員会(以下、市教委)の委託管理のもと、株式会社太陽測地社が行った。地元負担金については、市教委が国庫補助金・県費補助金を受けた。面積は710m²である。
3. 調査事務局は南砺市教育委員会文化課におき、文化課長 中島真市の総括のもと、文化財係長 林浩明、文化財係文化財保護主事 片田並紀が調査業務を担当した。現地調査は、太陽測地社遺跡事業部 発掘調査員 藤井秀明が担当し、本書の執筆は、片田と藤井が分担した。
4. 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々の協力・助言があった。記して謝意を表す。

野村清典 神山一郎 太崎建設株式会社 南砺市シルバー人材センター (順不同 敬称略)

5. 本書における挿図などの扱いは、次の通りである。

- 1 挿図中に指示した方位は座標北であり、国土交通省が告示する平面直角座標VII系に準拠した。また、土層断面等の水平基準の数値は海拔高(単位m)であり、T.P(東京湾平均海面標高)による。
- 2 上層の注記は、農林水産省農林水産技術會議事務局監修、財團法人日本色彩研究所 色票監修による2001「新版標準上色帖」の表記に準拠し、概測は「土色計」第一合成株式会社を使用した。
- 3 挿図の縮尺はタイトルに明示し、図中にスケールを付した。
- 4 写真図版の出土遺物の縮尺は、実測図に概ね一致する。付した番号は挿図番号に一致する。
- 5 遺物実測図のスクリーントーン使用例は以下の通りである。

1・C INC製 ILLUST SCREEN使用

内黒 S352

赤彩 S321

油眞 破線

輪ライ 一点破線

6. 調査参加者は次の通りである。

石崎清司 上島勝枝 大島英子 置山保治 片田行儀 高木久義 林 長敏 水口善嗣 宮丸登喜雄
山田きみ子 山田賢庄 大門ソト(以上、南砺市シルバー人材センター) 福沢佳典(富山大学大学院)

目　　次

I 位置と環境	1	第3図 神成遺跡14地区的調査区割	第6図 神成遺跡14地区的遺構1	13
第1図 位置と周辺の遺跡	1	5	第7図 神成遺跡14地区的遺構2	14
II 調査に至る経緯と経過	2	6	第8図 神成遺跡14地区的遺構3	15
第1表 調査経過	2	6	第9図 神成遺跡14地区的遺物1	16
第2図 遺跡範囲と調査区位置図	3	8	第10図 神成遺跡14地区的遺物2	17
III 調査の概要	4	9	図版1	
1 調査の方法	4	10	図版2	
第2表 遺跡の概要	4	11	図版3	
2 地形と基本層序	5	12	図版4	
			報告書抄録	

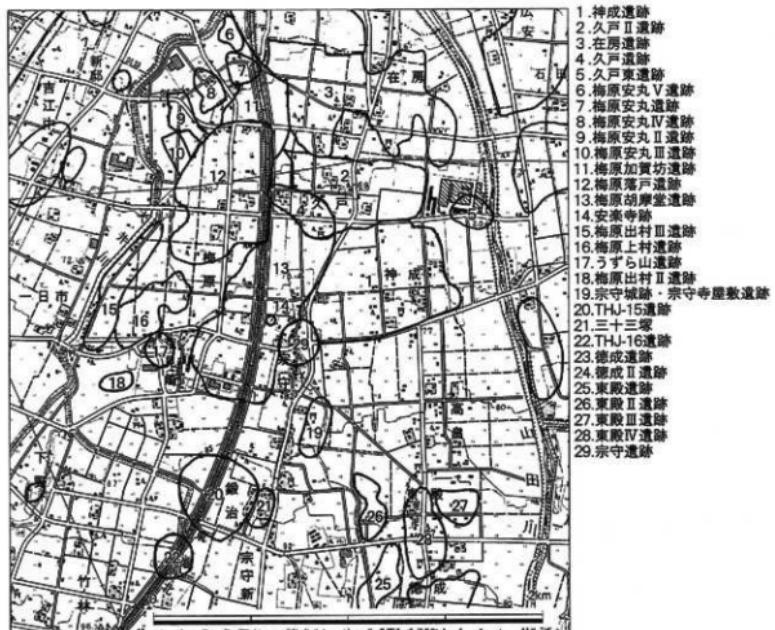
I 位置と環境

富山県南砺市は、石川県金沢市と県境をなす富山县の西南部に位置する。市の西側には、養老3年(719)、泰澄大師によって開山されたと言う雲峰院王山をはじめとする山脈が連なり、南西部にある大門山から流れる小矢部川が、その支流とともに平野部を形成する。福光の市街地は主に小矢部川沿いに展開し、小矢部川とその支流である山田川に挟まれた段丘には小河川が縦横に走り、それらを利用した田地が広がる。

神成遺跡は、山田川左岸の標高約67mから70mの緩やかな傾斜を持つ洪積台地上の高宮田尻面に位置する。神成遺跡は、神成地区のほぼ全域にあたる、東西560m、南北600mの範囲で広がっている。現況は主に田地・畑地である。山田川を隔て、衛波平野を一望できる微高地に立地し、台地末端から河川域までの比高差は2m前後を測る。

周辺には、在房遺跡、久戸遺跡、久戸II遺跡、宗守遺跡、梅原胡摩堂遺跡などの遺跡が密集しており、近年の調査で、古墳時代・奈良・平安時代の住居跡や中世の建物跡が数多く発見されている。また墨書き器や製塙土器なども出土しており、北山田地区一帯では古くから大規模な集落が営まれていたことがわかる。

文献資料では、旧福光町の一部が礪波川上郷に含まれていたとされている。平安時代には川上村と呼ばれ、官倉が置かれていたことが知られる。その後11世紀には円宗寺領石黒庄が成立し、当地域はそのうちの山田郷の一部に含まれる。



第1図 位置と周辺の遺跡 (S = 1 : 25,000)

II 調査に至る経緯と経過

平成10年(1998)、旧福光町北山田北部地区において、県は場整備事業(扱い手育成型)が策定された。この事業は農地を扱い手に集積し、経営規模を拡大させることにより低コスト化を目指すものであり、田の大区画による整備整備を行うものである。事業計画は在房、久戸、神成、宗守の約100haを対象とし、平成10年度から平成14年度までが工期とされた。これに先立ち平成8年度に、福光町教委員会(当時)が県埋蔵文化財センターの職員の派遣を受けて、事業計画地内で遺跡分布調査を行ったところ、広範囲において遺物の散布地を確認した。そのため、平成10年度からは国庫補助金を受けて遺跡の範囲確認を行うため試掘調査を実施した。試掘調査の結果、遺跡が広範囲にわたって遺存していることが確認されたため、県農地林務部、県教育委員会、地元土地改良区と遺跡の保護措置について協議を重ねた。その結果、遺跡の大半は盛土を行うことで水田下に保存し、一部の面工事・農道建設・用排水路部分のような遺跡が保存できない場所について本調査を実施することになった。以降、試掘調査を毎年度継続して行い、平成12年度からは並行して本調査を行っている。

平成18年度の調査は宗守遺跡3,030m²、久戸遺跡4,120m²、梅原胡摩堂遺跡3,650m²であり、田面調整工事により削平を受けるため本調査対象となった。

北山田北部地区に所在する遺跡の、これまでの調査面積は次のとおりである。

第1表 調査経過

	遺跡名	試掘調査対象面積	本調査面積	備考
平成10年度	在房遺跡	約 6.0 ha	—	
平成11年度	在房遺跡	約 24.3 ha	—	
	久戸Ⅰ遺跡	約 9.4 ha	—	
平成12年度	在房遺跡	約 6.1 ha	3,175 m ²	
	久戸Ⅱ遺跡	約 6.0 ha	—	
	久戸Ⅲ遺跡	約 3.8 ha	—	
	神成遺跡	約 9.3 ha	—	
平成13年度	在房遺跡	—	305 m ²	
	神成遺跡	約 18.3 ha	—	
	久戸Ⅳ遺跡	約 0.6 ha	—	
平成14年度	在房遺跡	—	640 m ²	
	久戸Ⅴ遺跡	—	1,010 m ²	
	宗守遺跡	約 1.7 ha	—	
	神成遺跡	約 3.2 ha	—	
	梅原胡摩堂遺跡	約 4.2 ha	—	
平成15年度	神成遺跡	—	1,599 m ²	
	久戸Ⅵ遺跡	—	1,743 m ²	
平成16年度	神成遺跡	—	2,620 m ²	うち1,010m ² 民間委託
	久戸Ⅶ遺跡	—	2,120 m ²	民間委託
平成17年度	在房遺跡	—	1,910 m ²	民間委託
	神成遺跡	—	3,370 m ²	民間委託
平成18年度	宗守遺跡	—	340 m ²	民間委託
	久戸遺跡	—	3,030 m ²	うち2,140m ² 民間委託
	梅原胡摩堂遺跡	—	4,120 m ²	うち2,430m ² 民間委託
	神成遺跡	—	3,650 m ²	うち2,710m ² 民間委託



第2図 遺跡範囲と調査区位置図 (S=1:5,000)

III 調査の概要

1. 調査の方法

調査区域の設定は、ほ場整備事業に係る工事用図面及び現地形からスケールアップし、設定した。調査区域の確定後、監督員・業務代理人立会いのもとで、重機による表土除去を行った。同作業に際しては、試掘調査データを参考に、耕作土と包含層上部を掘削した。試掘データから算出した重機掘削の深度は現地表面から35cmであったが、実際の作業では、調査区域南東部で現地表面下約20~25cmで遺構面を確認したため、そのレベルで重機掘削を停止した。また上記区域を除く範囲で当初予定された35cmの掘削を行い、再度検土杖を使用し遺構面までの深度確認を行った結果、さらに約30~50cm程度の掘削が必要と判明した。そのため、包含層からの出土遺物に注意しながら、さらに重機による掘削を実施した。最終的な重機による掘削深度は、調査区東壁側で南端から北に10m毎に、S-N0m~20cm、S-N10m~40cm、S-N20m~50cm、S-N30m~60cmである。重機掘削に伴う堆土は、耕作土と掘削土に分けて調査区外に搬出した。

重機掘削終了後、調査区の形状に合わせて、第3回のとおり、調査区割り(グリッド設定)を実施した。グリッドの名称は、各グリッド北西杭の名称で呼称した。

調査は包含層の掘削から着手し、出土遺物は各グリッド毎に取上げを行った。

遺構面までの掘削終了後、同面を精査し、遺構検出を行った。確認された遺構は、略号と通し番号を付して呼称した。また、検出後に1:100で略測図を作成し、管理した。

遺構掘削に際しては、半裁もしくはセクションベルトを残して掘削し、1:20で上層堆積状況記録図(以下、土層図)作成・記録写真撮影後に、完掘した。遺構からの出土遺物は、各遺構毎に取上げた。

遺構調査終了後にラジコンヘリコプターを使用して、空中写真測量を行い、合わせて、俯瞰・斜め写真等の撮影を行った。本米上記作業は全遺構完掘後に行うべきであるが、本調査では工期及び天候を考慮し、一部遺構完掘前に行った。同作業に間に合わなかった遺構については、後日完掘し、補測を行った。

現場作業終了後、出土遺物の整理作業、図面・写真的整理作業を行った。遺物の注記はジェットマーカー(第一合

第2表 遺跡の概要

遺跡名	所属時代	発見された遺構	発見された遺物
在房遺跡	縄文時代後期、古墳時代、古代、中世	竪穴住居、掘立柱建物、土坑、溝、井戸、柱穴	細文土器、須恵器、土師器、製塙土器、中世土師器、珠洲、青磁、白磁、木製品、筋鉢車
久戸遺跡	縄文時代、中世	土坑、溝、柱穴	細文土器、須恵器、土師器、珠洲、瀬戸、青磁、白磁、肥前系陶磁器
久戸II遺跡	縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世	竪穴住居?、掘立柱建物、土坑、溝、柱穴	縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、板、土鍬、中世土師器、珠洲、木製品
神成遺跡	縄文時代、古墳時代、古代、中世、江戸	竪穴住居、土坑、溝、柱穴	須恵器、土師器、中世土師器、珠洲、青磁
宗守遺跡	縄文時代中期、中世、近世	土坑、溝、柱穴	細文土器、石斧、土師器、須恵器、中世土解器
梅原朝摩堂遺跡	縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世、江戸	烟跡、掘立柱建物、溝、掘、竪穴住居、井戸	細文土器、打刃石器、土師器、須恵器、中世土解器、珠洲、青磁、白磁、越前、越中瀬戸、瀬戸美濃、石臼

成)を使用し、遺跡名略号「KNJ」と地区名「14」、出土地点・出土遺構名、出土年月日を注記した。また、補強・復元が必要な土器についてはバイサム(新成田総合社)を使用した。作業終了後、遺物整理箱(矢崎化工 ポリテナー PT14)に、包含層は出土地点毎に、遺構出土品は一括して納めた。図面は一括してファイルに収め、通し番号を付し、図面台帳で管理した。写真は工事用ネガアルバム(KOKUYO)に、カラーと白黒に分けて収めた。

2. 地形と基本層序

本調査区は神成遺跡の北西部に位置する。現況は農業用地として使用されている。海拔高度は75.0~75.6mを測り、同区内南東部が高く、北東部~南西部にかけて低くなり、北西部が若干高くなる。現地表面からの比高差は最少約25cm、最大約80cmである。基本層序は上位から順に、現耕作土・包含層上層・包含層下層・地山1・地山2の順である。耕作土は約20cm程度堆積しているが、若干北側に厚く堆積している。包含層の上層部では遺物出土は無く、下層で僅かに確認したのみである。また南東部では包含層の堆積は認められない。地山1は砂質を多く含む黄褐色弱粘質土、地山2は径5~20cm程度の礫層である。地山2は調査区西側~北側の広範囲で確認された。検出状況を見ると地山2の部分の海拔高度がやや高めであるが、層序を確認した結果、地山2の方が地山1の下位(下層)であることを確認した。従って全体を通じて地山1・地山2を見ると、地山2は西から東へ、北から南へ傾斜して堆積し、その低い部分に地山1が堆積していることが確認された。遺構は地山1部分で確認され、地山2部分ではピット2基以外に確認されていない。また、地山2上では包含層の堆積は薄く、ほぼ直上が耕作土である。



第3図 神成遺跡14地区の調査区割 (S=1:2,000)

3. 遺構の概要

本調査区で確認した遺構は掘立柱建物3棟、土坑6基、井戸1基、溝5条、ビット208基である。

第3表 建物跡について

建物	規模	南北主軸方向	柱穴の規模	柱間距離	検出面	出土遺物
SB01	東西1間以上×南北2間	N- 6° -E	平均径 31.3cm	東西約2.3m	遺構面	中世土器 珠洲 潤戸
				南北約2.5m		
SB02	東西3間×南北4間	N- 2° -W	平均径 46.3cm	東西約2.7m	包含層中	中世土器 珠洲 潤戸
				南北約3.0m		
SB03	東西2間×南北2間	N- 4° -E	平均径 54.4cm	東西約2.8m	包含層中	
				南北約3.3m		

SB01 (第6図・図版2)

調査区南東隅、X7～9、Y12～15付近に位置する。SB01で確認された規模は第〇表の通りだが、建物として東西1間というのは想定しにくいので、おそらく調査区外東側に展開すると思われる。柱穴は小規模で、掘削深度も極めて浅い。同遺構周辺部では包含層の堆積が認められず、遺構面直上が現耕作土であった。調査区内でも最も標高の高い位置にあるため、包含層は削平された可能性もある。柱間距離は東西・南北で異なり、その比率は1:1.1である。検出面は、耕作土直下の地山面である。

SB02 (第7図・図版2)

調査区中央部、X6～10、Y2～9付近に位置する。SB02は当初検出段階では東西2間×南北3間と見られたが、調査の結果、北側で3間分の柱列を確認し、柱間距離や位置関係などから、南北4間であることがわかった。また検出段階で、同遺構西側にもやや規模の小さい柱列と見られるビットを確認したが、北側で3間分を確認したことにより、これらも同遺構の柱列と認定した。柱穴は20本中12本は比較的大型で、井戸跡としたSE01の径が約80cmであるのに対して、いずれも径が50cmを超えるものである。これに対して、西側の小型の柱列は径が30cm前後しかなく、他に比べて細い。このことから、この建物には「底」もしくはこれに類する設備があったことが推測される。柱間距離はSB01同様の状況で、その比率は1:1.1である。検出面は包含層中であるが、さらに上位で検出できた可能性がある。覆土には緻まりが無く比較的軟質で、周囲の包含層と大差が無い。また土層を見ると、長期間をかけて徐々に埋没したような状況ではなく、柱材抜き取り後、直ちに埋め戻したことが推定される。

SB03 (第6図・図版2)

調査区南西隅、X0～3、Y11～15付近に位置する。SB03は周辺に多くのビットがあり、検出状況では建物の特定が困難な状況であった。その為、全てのビットを半蔵し、断面観察等も考慮し、建物を復元した。結果、東西2間×南北2間の建物が確認された。南北主軸方向や柱穴の規模がSB01とほぼ同一であることから、同時期の建物と推定される。柱間距離は上記2棟と同様、南北間が長く、比率は1:1.2である。検出面はSB02と同様に包含層中である。

以上から、この3棟についてはSB01とSB03が主軸方向の一一致、SB02とSB03が検出面の一一致がみられることから、大きな時期差はないものと考えられる。中でもSB01とSB03が時期的に近く、SB02がやや異なる可能性がある。

SK01 (第8図・図版3)

調査区北端、X9Y0付近に位置する。東西約1m、南北約1.5m、深さは最大で約25cmを割り、調査区外北側に延びると考えられる。覆土は黒～黒褐色羽粘質土で2～3層に分層できる。南側壁面は比較的直角に近い形状で立ち上がるが、東西向壁面は緩やかに立ち上がる。溝状遺構端部の可能性がある。

SK02 (第8図・図版3)

調査区北側、X 5 ~ 6 Y 3付近に位置する。東西約1.3m、南北約0.7m、深さ約20cmを測り、ほぼ長方形を呈する。覆土は黒色弱粘質土の単層で、硬く締まった土質である。上層部に径約10~28cm前後の礫を含む。底部は平坦だが、壁面は緩やかに弧を描くように立ち上がる。

SK03 (第8図・図版3)

調査区北側、X 9 Y 0 ~ 1付近に位置する。東西約0.7m、南北約1.5m、深さ約40cmを測り、ほぼ長方形を呈する。覆土は黒色弱粘質土の単層で、南端部をP069に切られる。底部がやや丸味を帯びたV字形の土坑である。

SK04 (第8図・図版3)

調査区南東隅、X 9 ~ 10 Y 12 ~ 14付近に位置する。東側が調査区外に続くため全体は不明である。確認できた部分は約1.7m、南北約4.7m、深さ約50cmを測り、ほぼ円形の土坑と推定される。覆土は上層が概ね黄灰色、下層が黒褐色を呈する弱粘質土で5層に分層できる。遺構周辺には包含層の堆積が確認できず、検出面は現耕作土直下である。

SK05 (第8図・図版3)

調査区南側、X 8 ~ 9 Y 11付近に位置する。東西約1.6m、南北約1.2m、深さ約30cmを測り、不整形な長方形、もしくは横円形を呈する。覆土は黒褐色弱粘質土の単層である。地山が北に下がる傾斜変換点付近に位置し、検出レベルは南側の遺構面とほぼ同一レベルであるが、遺構面が傾斜しているため、深さは極めて浅い。

SK06 (第8図・図版3)

調査区南端部、X 9 Y 14付近に位置する。東西約1.2m、南北約1.2m、深さ約24cmを測り、不整形な円形を呈する。覆土は黒～黒褐色弱粘質土で、硬く締まっているが、現耕作土に近い土質である。底部は比較的平坦で立ち上がりも急である。底部及び側面の一部に礫層を確認したが、同層は調査区全体に広く展開するものであり、この遺構に特有のものではない。

SE01 (第8図・図版3)

調査区南側、X 7 Y 12 ~ 13付近に位置する。径約80cm、深さ約1.3mを測り、ほぼ円形を呈する。覆土は黒褐色弱粘質土を主とする4層に分層できるが、西側肩部で確認した4層を除く他3層に大差は無く、砂質含有の程度差及び鉄分沈着の多少により分層できるが、基本的には同一土質で、耕作土に近い土質である。底部は緩やかに弧を描くがほぼ平坦で、壁面はほぼ直角に立ち上がり、円筒形の形状である。井戸側板等の内部構造は確認されなかったが、遺構面から東側で40cm、西側で55cmより下位の部分は礫層を掘り抜いて造られており、非常に脆い壁面であるにもかかわらず、調査段階で壁面の崩落が確認できなかった事から、本来は何らかの内部構造があったと思われる。おそらく井戸廃棄に伴い、抜き取られたものであろう。

SD01 (第8図・図版3)

調査区北側、X 5 ~ 6、Y 0 ~ 2付近に位置する。幅約40cm、全長約4m、深さ約10cmを測る。覆土は黒～黒褐色弱粘質土の2層である。

SD02 (第8図・図版3)

調査区北側、X 7 Y 3付近に位置する。幅約40cm、全長約90cm、深さ約12cmを測る。覆土は黒色弱粘質土の単層である。

SD03 (第8図・図版3)

調査区北端部、X 7、Y 0 ~ 1付近に位置する。幅約40cm、全長約2.5m、深さ約60cmを測る。覆土は黒褐色弱粘質土の単層である。

SD04 (第8図・図版3)

調査区中央部、X 5 ~ 7、Y 6 ~ 8付近に位置する。幅約75cm、全長約5.5m、深さ約24cmを測る。覆土は黒~黒褐色剥離土上の单層である。南東端部はSD05に接する。

SD05 (第8図・図版3)

調査区中央部、X 7、Y 6 ~ 8付近に位置する。幅約35cm、全長約4.5m、深さ約20cmを測る。覆土は黑色弱粘質土を主として2層に分層できる。

ピット208基については、大別して2層の異なる層位で検出している。一群は包含層掘削作業に係る上面精査段階で確認したものである。重機掘削の段階でこうした状況を想定していなかったため、本来さらに上位で検出できた可能性もある。いずれにしても、黄褐色を呈し、砂質を多く含む地山(造構面)より上位から掘り込まれたものである。もう一方の一群は包含層の掘削が終了した後、地山面の精査を行った結果確認したものである。3棟確認した掘立柱建物の内、SB01を構成するピット(柱穴)は後者に、SB02・03を構成するピットは前者に属する。

4. 遺物の概要

土器

SB02・E2N1柱穴(第9図 図版4)

1は中世土師器・皿である。ロクロ成形で、内外面ともナデが施され、底部は糸切りである。

SB02・E1N2柱穴(第9図 図版4)

2は珠洲・壺である。

SB02・E1N2柱穴(第9図 図版4)

3は陶器(瀬戸か?)・皿である。15世紀頃とみられる。灰釉が施釉されている。

SK05(第9図 図版4)

4は中世土師器・皿である。内外面ともナデが施され、いずれも赤彩が施されている。

SK06(第9図 図版4)

5は中世土師器・皿である。ロクロ成形で、内外面ともナデと指頭圧痕がみられる。上部内外面ともに油煙痕がみられる。

包含層(第9・10図 図版4)

6~12は縄文土器である。

6は深鉢である。口縁部に刺突文と沈線2条がみられる。胸部には板状工具によるナデが施される。7は深鉢である。外面はナデ、内面は板状工具によるナデが施される。8は深鉢である。外面はほぼ縱位の工具によるナデ後ミガキが施される。内面は板状工具によるナデが施される。口唇部に面取りがみられる。9は深鉢である。外面には条痕、内面には板状工具によるナデが施される。外面に煤の付着がみられる。10は鉢である。外面にはミガキが施され、口縁は波状で、沈線7条がみられる。11は鉢である。外面にはナデと縄文が施され、刺突文2条がみられる。内面にはナデが施される。外面の一部に赤彩が施され、穿孔が1箇所確認できる。12は深鉢である。内外面ともに板状工具によるナデが施される。口縁は波状である。

13~15は弥生土器である。

13は甕である。口唇部にキザミ目、頸部にハケ目と筋状のキザミ目が施される。内面にはハケ目が施される。14は壺である。外面にはナデが施され、指頭圧痕がみられる。内面には丁寧なナデが施される。15は甕である。外面の口縁には波状文がみられ、頸部~胸部には斜位のハケ目の後、板状工具によるナデが施される。内面の口縁には横位の

ハケ目が施された後、斜行短線文がみられる。

16~17は須恵器である。

16は蓋である。外面にはロクロナデとヘラオコシが施され、内面にはロクロナデが施される。ツマミは欠損し、外面には自然釉がみられる。17は杯である。外面にはロクロナデとヘラオコシが施され、内面にはロクロナデが施される。高台は貼付高台である。

18~23は中土土解器である。

18は有台皿である。ロクロ成形で、内外面ともナデが施される。外面に指頭圧痕がみられる。19は有台皿である。ロクロ成形で、内外面ともナデが施される。底部は糸切りである。20は内面黒色の椀である。内外面ともミガキが施され、内面の一部には板状工具による横ナデが施される。21は皿である。内外面とも横ナデが施される。外面底部にはナデが施され、指頭圧痕がみられる。22は皿である。内外面とも横ナデとナデが施される。23は皿である。ロクロ成形で、内外面ともナデが施される。底部は糸切りである。

24・25は珠洲である。

24は甕である。外面にタタキ、内面には当て具痕がみられる。口縁の一部に沈線がみられる。25は甕である。外面にタタキ、内面には当て具痕がみられる。

26は背磁の鉢である。15世紀とみられる。植物系の陽刻がみられる。

石器

SK04 (第10図 図版4)

27は石臼である。貫通する穿孔がみられるため、上臼と思われる。表裏両面とも回転方向と異なる擦痕が多くみられる事から、砥石に転用されたものと思われる。

包層 (第10図 図版4)

28・29は打製石斧である。28はほぼ完形で、砂岩とみられる。29は基部側約半分を欠損する。石材は不明である。

IV まとめ

本調査に関する成果はこれまで述べてきたとおりであるが、加えて、作業に参加して頂いた置田保治氏(神成在住)より、調査区付近には昭和初期の段階で民家が建てられており、その建築の際には從米屋敷地として使用されていた場所に建てられたという話をお聞きした。

以上の事から、本調査区の状況をまとめると、以下のことが想定される。

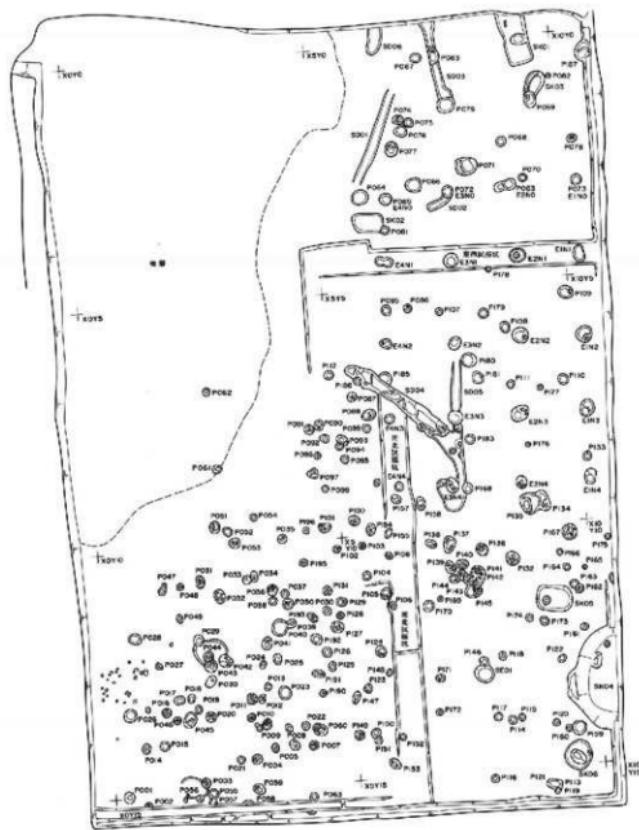
本調査区付近は、本来は緩やかな傾斜地であったが、比較的新しい時期に宅地(屋敷地)として利用するため、盛土により造成された。その後、昭和初期の段階まで宅地として利用されていたが、耕地整理等の事業に伴い、既存の建物は取り壊し、あるいは移築・移転し、現況に近い状況の農業用地化された。本調査に際し、現耕作下層の包層とした土壤については、宅地建設に伴う造成に関わる盛土(客土)の可能性が高い。その為、先に述べたとおり、肩位に関係なく、縄文～近世に漸層する遺物が出土する。

遺構検出面(地山)で検出した遺構は、おそらく古い時代のものであろうが、包層中で検出された遺構、特に3棟確認された建物跡については、客土による盛り土が成された後に建設されたものであり、SB02柱穴からの出土遺物や、先に紹介した置田氏の話にあるように、昭和初期に民家が存在し、時期は不明ながら、建設の際には、この場所が屋敷地であるという記憶あるいは認識が一般に残っていたことなどを合わせて考えると、それほど古いものではなく、近世以降のものであろう。また、上記のとおり、包層とした土壤が客土であった場合、本調査で出土したものであつ

ても、本調査区の状況を反映しているとは言えない。しかしながら、現代のような大規模な工事(整地作業)が行われたとは考え難く、周辺近接地の微高地を削平し低地に盛土したであろう事を考えると、周辺部では、縄文時代以降、人々の生活が営まれた可能性があるが、具体的な時期やその様相を示す資料(遺構)は本調査では確認できなかった。

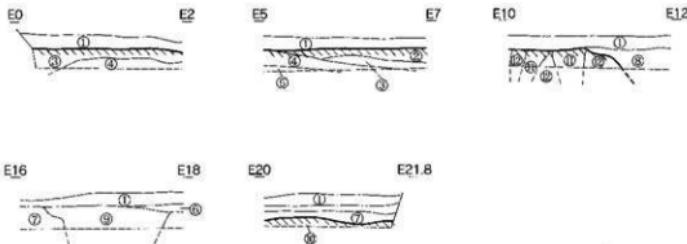
引用参考文献

- 福光町教育委員会 2002 「佐房遺跡II」
- 福光町教育委員会 2004 「神成遺跡I 久戸II遺跡I」
- 福光町教育委員会 2004 「神成遺跡I 久戸II遺跡II」
- 南砺市教育委員会 2005 「久戸II遺跡III 神成遺跡II」
- 南砺市教育委員会 2006 「久戸II遺跡II」



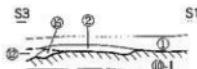
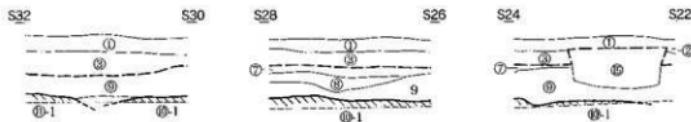
1 : 200

第4図 神成遺跡14地区平面図 (S=1:200)



調査区南壁土層断面図

- | | | |
|--------|------------|---------|
| ① 樹木土 | 7.5YR 2/1 | 黒色土 |
| ② 地山 | 7.5YR 3/3 | 暗褐色砂質土 |
| ③ 地山 | 10YR 3/3 | 暗褐色砂質土 |
| ④ 地山 | 10YR 2/2 | 黒褐色砂質土 |
| ⑤ 地山 | 10YR 3/3 | 暗褐色砂質土 |
| ⑥ 包含層 | 7.5YR 3/1 | 黒褐色弱粘質土 |
| ⑦ 包含層 | 10YR 2/1 | 黒褐色弱粘質土 |
| ⑧ 包含層 | 10YR 3/1 | 黒褐色弱粘質土 |
| ⑨ 包含層 | 7.5YR 3/1 | 黒褐色弱粘質土 |
| ⑩ 地山 | 10YR 3/2 | 黒褐色粘質土 |
| ⑪ 道構覆土 | 10YR 1.7/1 | 黒褐色弱粘質土 |
| ⑫ 道構覆土 | 7.5YR 3/3 | 暗褐色弱粘質土 |



調査区東壁土層断面図
南壁1に対応

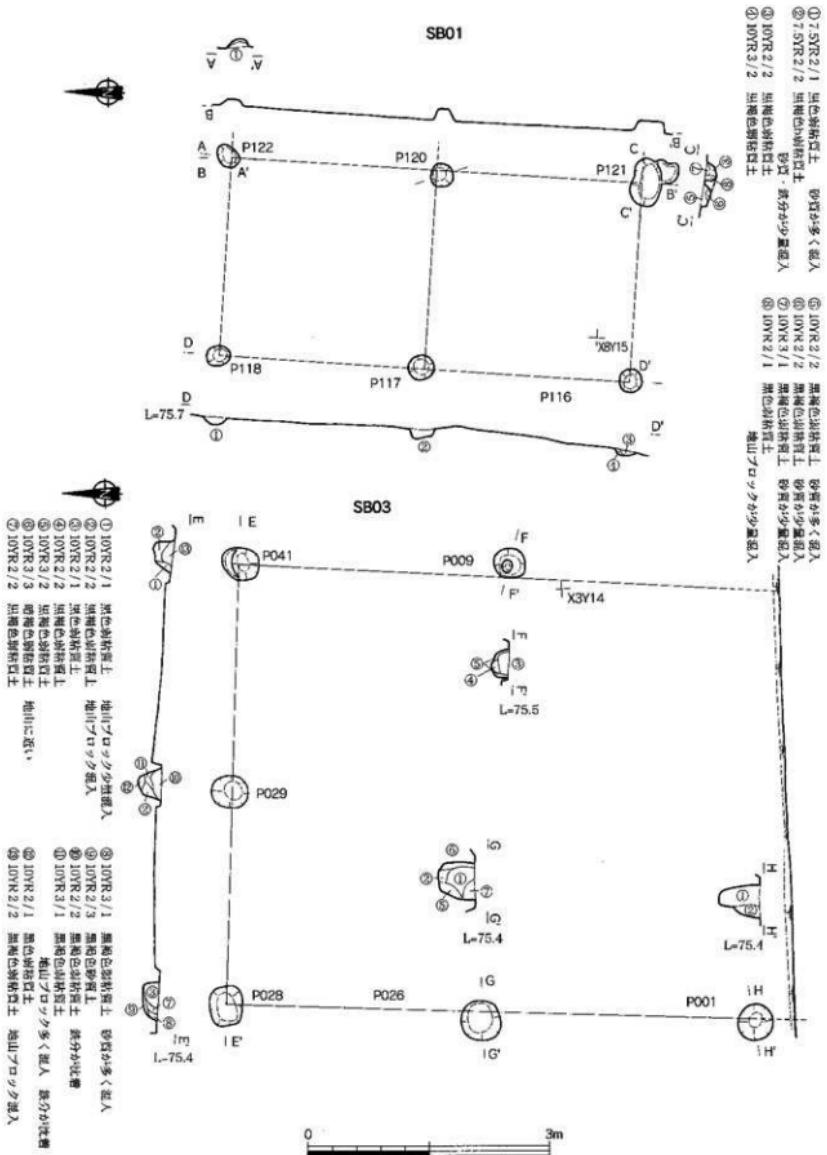
- | | | |
|-------|-----------|---------|
| ① 樹木土 | 7.5YR 2/1 | 黒褐色粘質土 |
| ② 樹木土 | 2.5Y 3/2 | 暗褐色弱粘質土 |
| ③ 樹木土 | 2.5Y 3/1 | 黒褐色粘質土 |
| ④ 包含層 | 10YR 3/1 | 黒褐色粘質土 |
| ⑤ 包含層 | 2.5Y 3/1 | 黒褐色粘質土 |
| ⑥ 包含層 | 2.5Y 3/1 | 黒褐色粘質土 |
| ⑦ 包含層 | 2.5Y 2/1 | 黒褐色粘質土 |

- | | | |
|--------|------------|----------------------|
| ⑧ 包含層 | 2.5Y 3/1 | 暗褐色粘質土 |
| ⑨ 包含層 | 10YR 1.7/1 | 黒色粘質土 |
| ⑩ 地山 | 2.5Y 3/3 | 暗オリーブ褐色粘質土 砂質をわずかに含む |
| ⑪ 地山 | 10YR 2/2 | 黒褐色弱粘質土 砂質を含む |
| ⑫ 地山 | 10YR 3/2 | 黒褐色弱粘質土 砂質を多く含む |
| ⑬ 道構覆土 | 10YR 2/2 | 暗褐色砂質土 小石が多く混入 |
| ⑭ 道構覆土 | 10YR 2/1 | 黒褐色弱粘質土 |
| ⑮ 道構覆土 | 2.5Y 3/2 | 暗褐色弱粘質土 |
| ⑯ 道構覆土 | 2.5Y 2/1 | 黒褐色弱粘質土 3層が侵入 |
| ⑰ 道構覆土 | 2.5Y 2/1 | 黒褐色弱粘質土 |

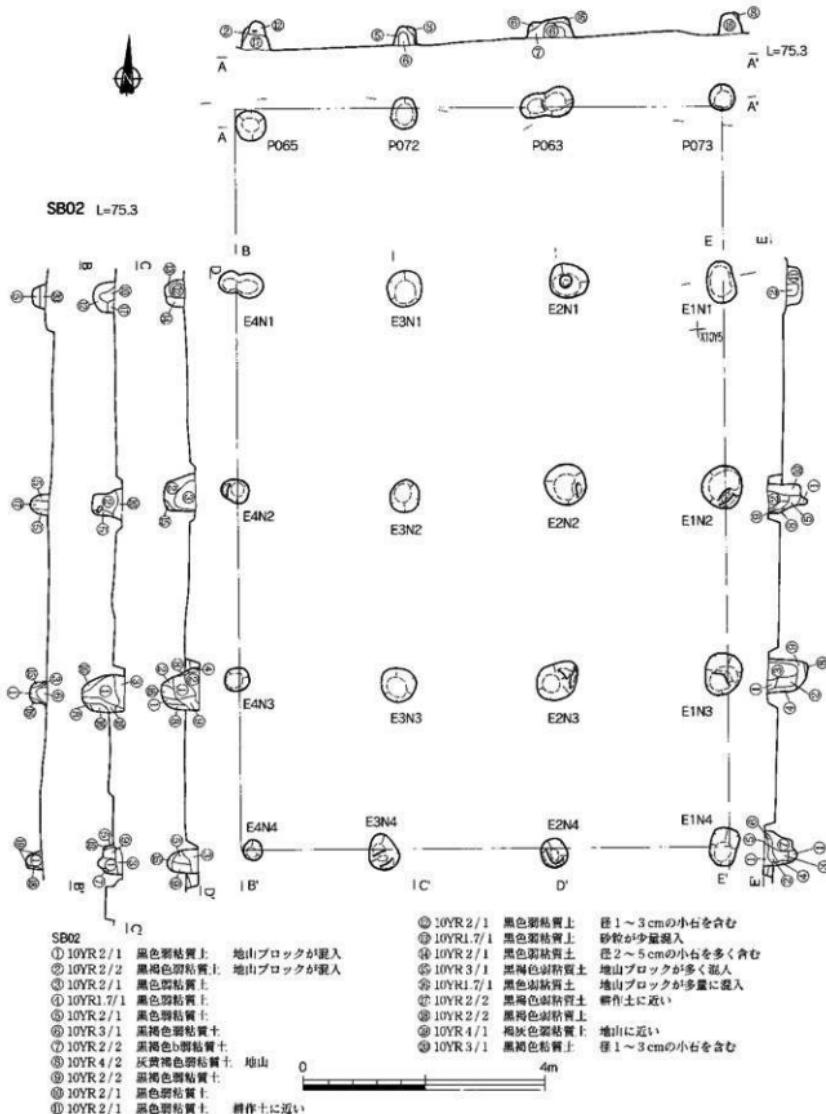
0 3m

第5図 神成遺跡14地区の基本土層図

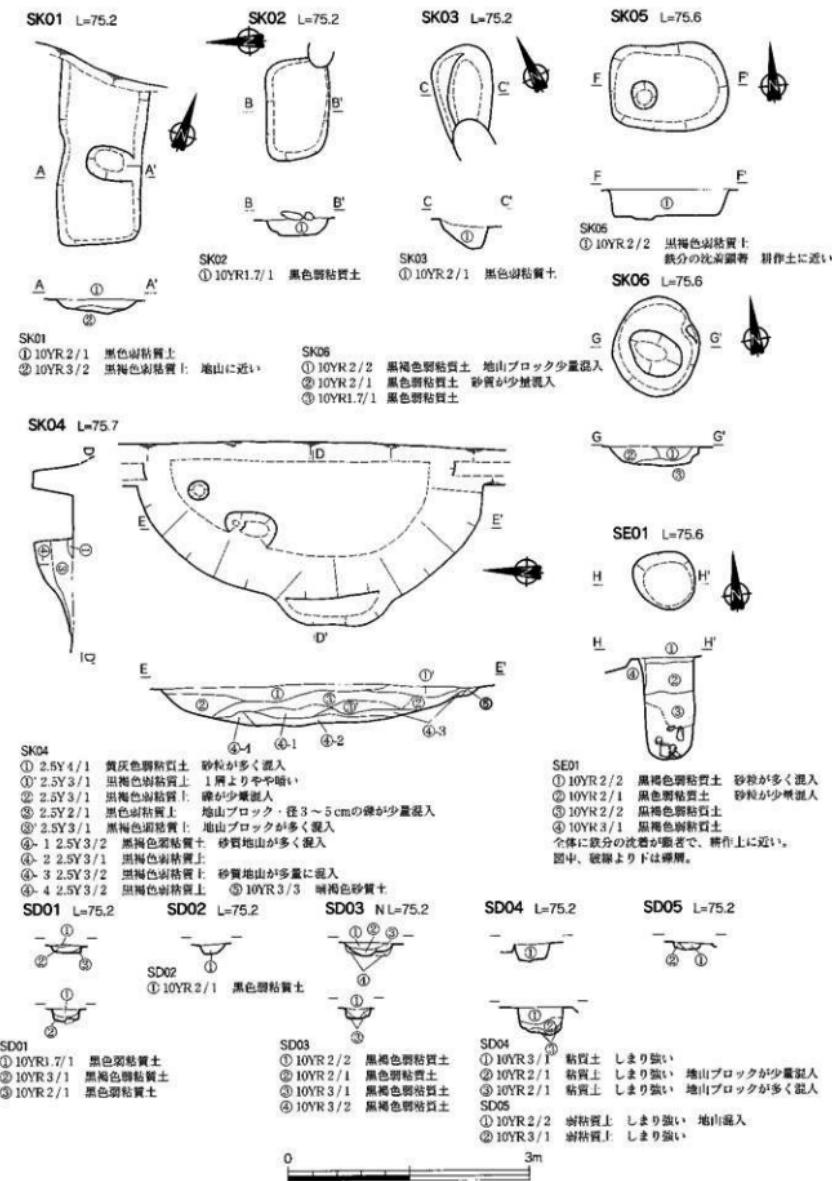
(S = 1 : 60)



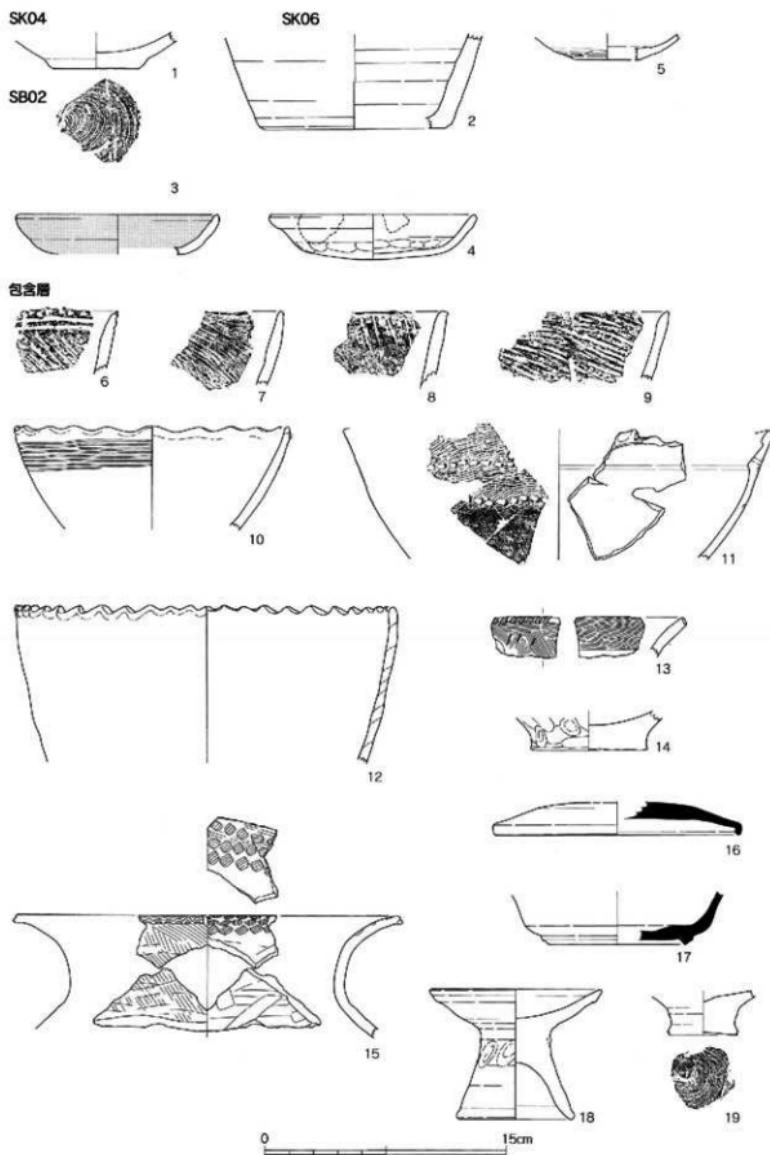
第6図 神成遺跡14地区の遺構1 (S=1:60)



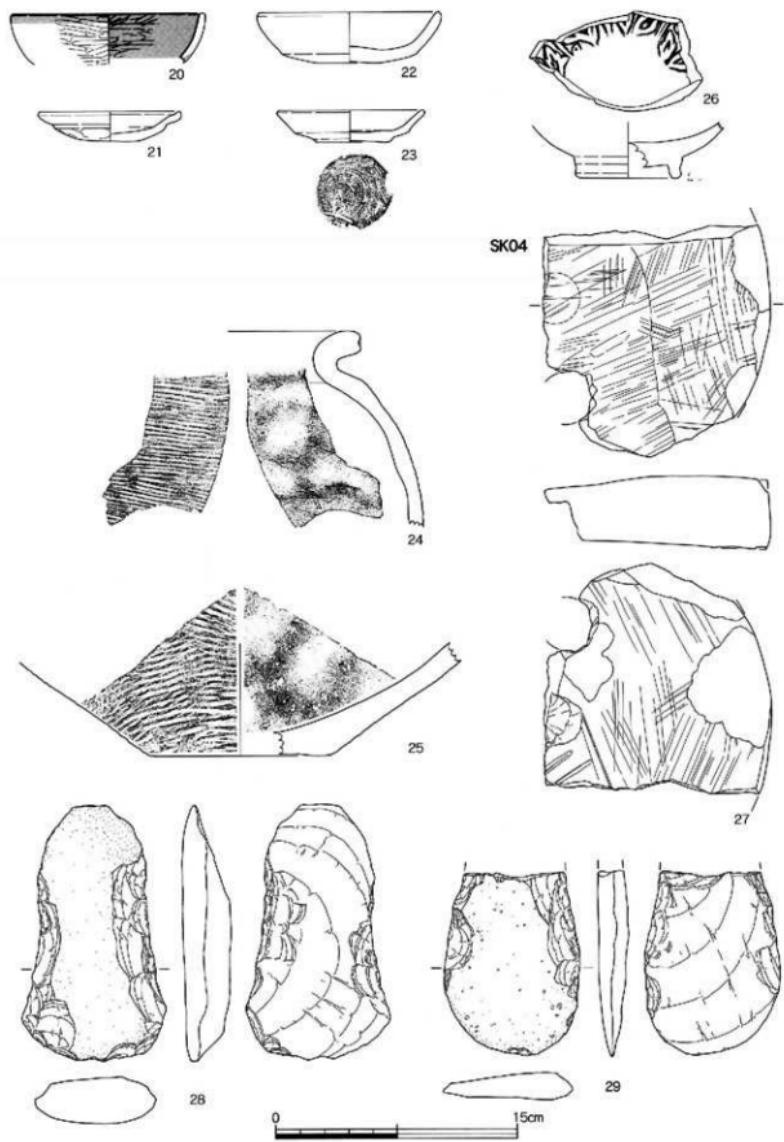
第7図 神成遺跡14地区の遺構2 (S=1:80)



第8図 神成遭跡14地区の遺構3 (S = 1 : 60)



第9図 神成遺跡14地区の遺物1 (S=1:3)



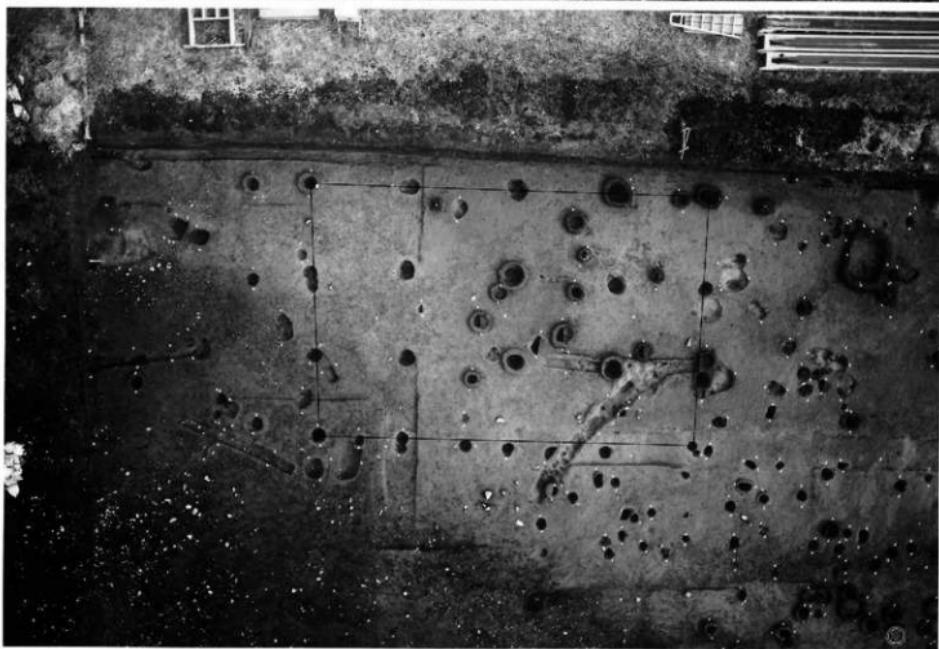
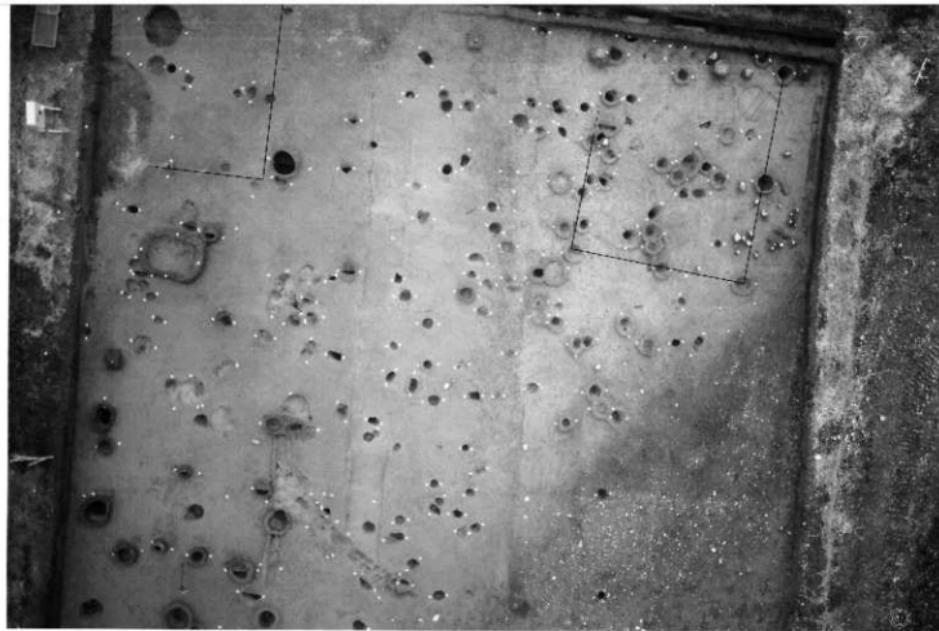
第10図 神成遺跡14地区の遺物 2 (S=1 : 3)



図版 1 神成遺跡14地区遺景

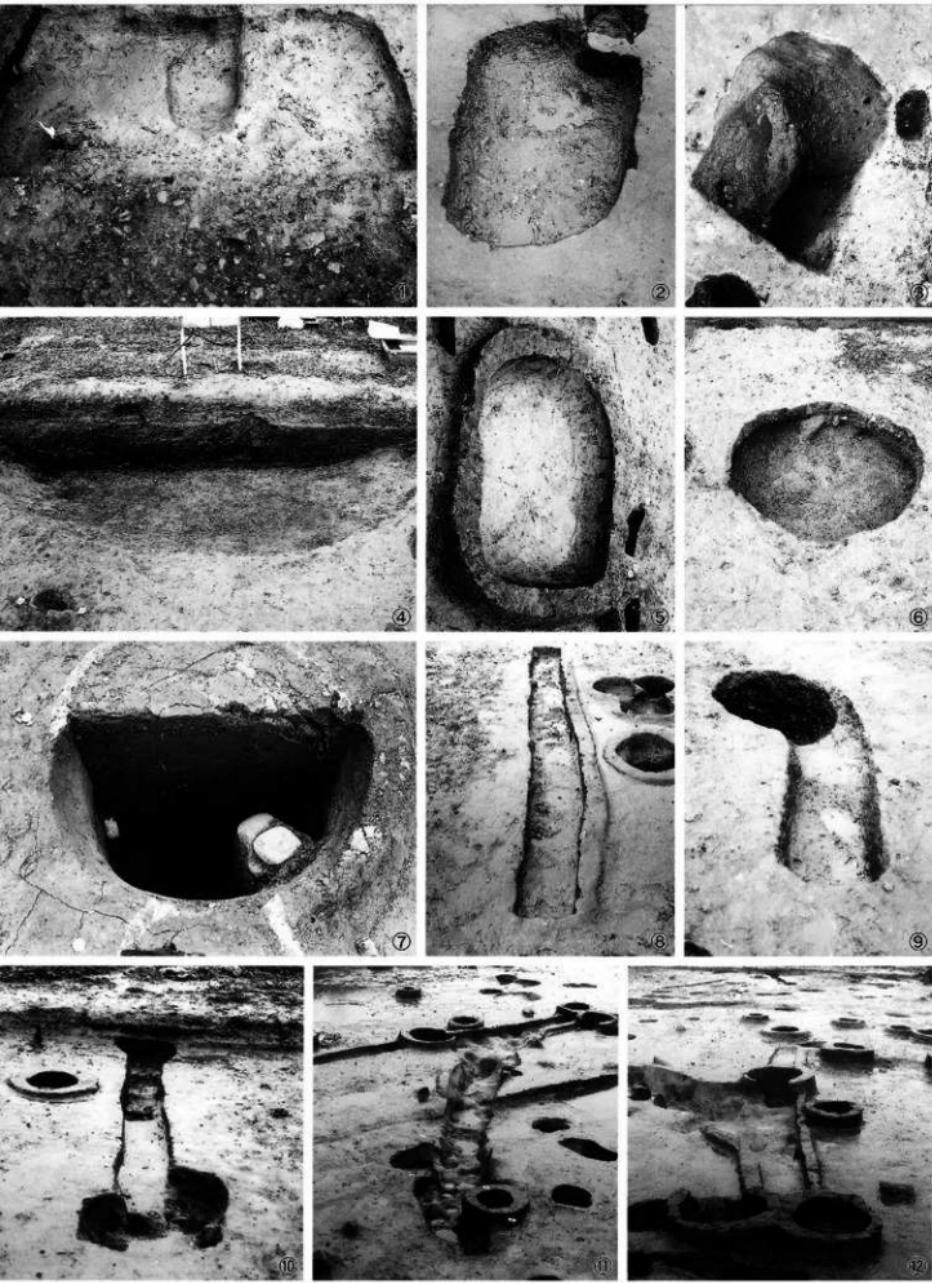
①調査区遺景(南から)

②調査区全景真上から



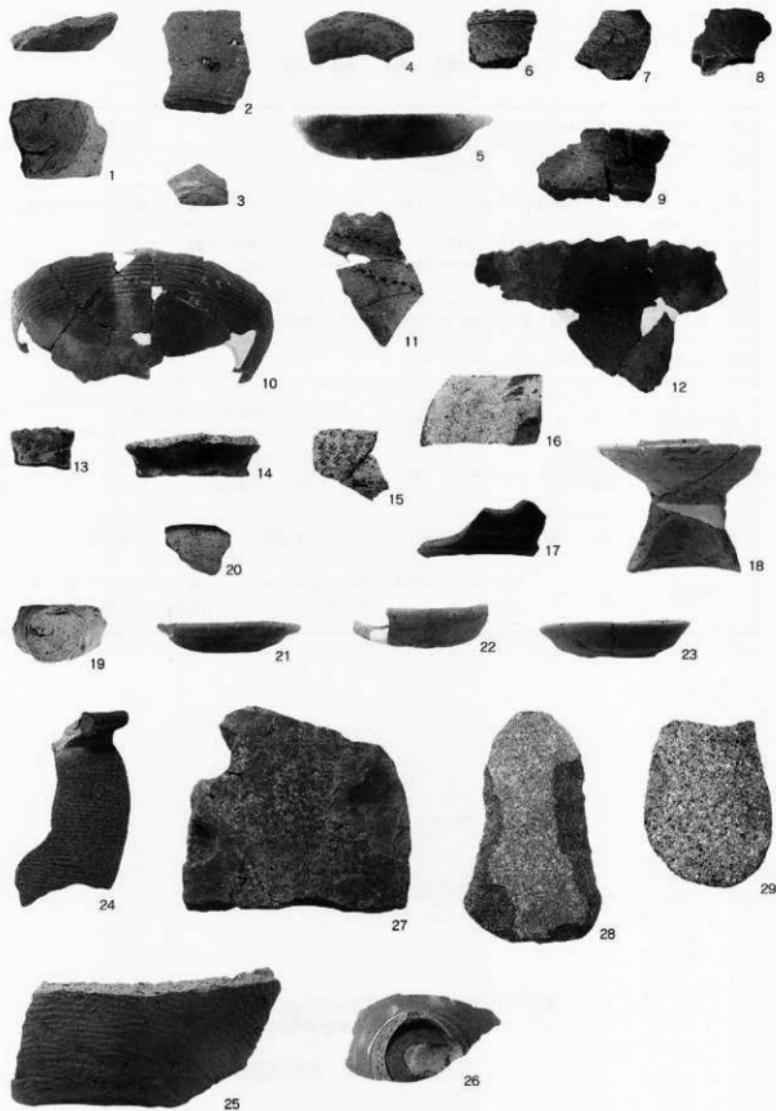
図版2 神成遺跡14地区の遺構 1

①SB01・SB03 (写真下が北) ②SB02 (写真左が北)



図版3 神成遺跡14地区の遺情2

- ①SK01（西から） ②SK02（西から） ③SK03（南から） ④SK04（西から） ⑤SK05（西から）
- ⑥SK06（西から） ⑦SE01（北から） ⑧SD01（南から） ⑨SD02（西から） ⑩SD03（南から）
- ⑪SD04（西から） ⑫SD05（南から）



図版4 神成遺跡14地区の遺物 (S=1:3)

報告書抄録

ふりがな	とやまけんなんとし かんなりいせきご							
書名	富山県南砺市 神成遺跡V							
副書名	県営ほ場整備事業(担い手育成型)北山田北部地区に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(9)							
編著者名	片山亞紀(南砺市教育委員会)・藤井秀明(株式会社太陽測地社)							
編集機関	南砺市教育委員会							
所在地	〒932-0292 富山県南砺市芦波520 TEL (0763) 23-2014							
発行年月日	西暦2007年3月15日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
神成遺跡	富山県 南砺市神成	市町村	遺跡番号	36度33分 38秒	136度54分 37秒	061011 ～ 061121	710	県営ほ場 整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
神成遺跡	集落	縄文・弥生・古墳・ 近世	掘立柱建物・井戸・土 坑・溝	縄文土器・弥生土器・近 世陶磁器・打製石斧・石臼				

県営ほ場整備事業(担い手育成型)北山田北部地区に伴う
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(9)

富山県南砺市 神成遺跡V

平成19年3月

編集 南砺市教育委員会

発行 南砺市教育委員会

印刷 高桑美術印刷株式会社

